



一 火薬大敵 火明者 獨逸
 蘭七 僧宿ハルトルトスワ
 ルツと云ふ人の西曆千二百
 二十年 徳元應二の頃 火
 薬を發明せりと 通次也
 七 後子四百二十五年 家
 子ウレニベルグ 地としてハルステン
 とり人の車と云て火薬と



子ウレシベルグ、地としてハルステン

とりつゝの車とみて火薬と

為る製せしこり、蓋映

石と道あり付らぬに火薬

を用ひし、獨逸の増スワ

ルツと創始とおもへり

然し母層火薬のうらと

煩穢の創製者、謂へ

一、大煩巳母成足の

不便なる、轉便し火薬

造り難、二、更一、揮

千四百八年、或は一、或は

火種と以茶地、火と

る考例、或は後子、或は

七十一年、或は文、或は子府

か、始り、院、檢、造

一、和蘭新量、一、介、或は百六十

如し始より洗拾し造る

一和蘭新量一斤我武百六十

七及古外二百之松き文

一砲燄鑄造之別合重煩

二号砲百斤小湯十一斤

輕煩之砲百斤小湯十斤

一鉄煩中軟鐵之最好

ふり

硝石

一硝石之潔白味之清涼也

抱上品之黄硝石之晶散

六面柱之色白之透明

硝石之佳者なり一石

木炭

一灰乃上品之良炭也二号

以て折合をせしむる



木炭

一 灰乃上品也其色一二年

以て赤金を以て置法は

破砕の支うの光輝可

名紙黒うろの佳品とあり

魚一木の骨木又の白

楊麻楷等々の木代時傳

硫黄

一 硫黄之膏黄之

味ひぬ〜白に焼く或は

少〜温むを以て用

試み焚く〜これに雜物

少〜石上を以て

焼淨

一 燉毒〜白く焼淨



焼弾

一 礮臺より約一丈の焼弾

乃 電燈を以て照らす

十二寸の弾は一割

一割乃四分と通算

二十寸の弾は一割

二割半を以て通算

白粉を 礮臺の一割に 我 5/10

ハシ火薬と草袋を以て

固密を以て 而して

煙を紙袋に入れて

火薬を以て

煉を三寸も五分

を以て 活け



焼く二寸五分の

焼く二寸五分の

焼く二寸五分の

焼く二寸五分の

焼く二寸五分の

焼く二寸五分の

焼く二寸五分の

焼く二寸五分の

焼く二寸五分の

焼く二寸五分の

焼く二寸五分の

以上

高橋四郎

高鴻四所集

个曾补甲斐与

三宅生三

元治乙丑年

三月古祥日



白藤約次所集



